

II 研究論文

読みにおける状況の文脈の導入と語りの構造

松 本 修

1 研究の目的

文学テキストの読みにおける個々の読み手の解釈の形成のプロセスで、テキストの文脈と状況の文脈がリソースとなること、また、その文脈の導入に読み手のメタ認知がはたらくこと、そして、読みの交流活動において、リソースとして導入された文脈へのメタ認知的レベルからの言及があり、メタ認知的変容があるとき、交流が成立することなどを論じてきた。(松本2000, 2001, 2002b, 2003a, 2003b, 2004b, 2004c, 2005b など)

この一連の研究は、文学テキストにおける〈語り〉にかかわる契機が、文学テキストへの読み手の働きかけの重要な鍵となっていることを明らかにすると同時に、そのような〈語り〉にかかわる契機が読みの交流を促す上でのポイントを作ることで、個々の読み手の読みの個性を浮き彫りにしていくことを明らかにするものであった。これによって、〈語り〉への着目および〈語り〉をポイントとした読みの交流活動の学習過程デザイン上の有効性が示されたと考える。

ただし、部分テキストにおける〈語り〉にかかわる要素が、テキスト全体の語りの構造と密接に関わる事は理論上も学習過程上も重要な点であるにもかかわらず、テキスト全体のマクロ構造に対する学習者の認知が、具体的に学習者の中でどのようにはたらくのか、またそうしたことがらへのメタ認知が読みの交流の中でどのように現れるのかについては、焦点化した検討はしてこなかった。

本研究は、そのうち特に読みを導入される状況の文脈とテキストのマクロ構造にかかわる語りの構造が、どのような関係を持ちつつ学習者に意識化されていくかについて、文学テキストをめぐる二つの話し合いプロトコルをデータとして検討したい。テキストの文脈にかかわる要素がテキストのマクロ構造に結びつく経緯は文学テキスト分析のレベルからも容易に推測できるが、読みの方略や個人の経験など

にかかわる状況の文脈の導入において、語りの構造がどのように関係するかについてはよく分からない点が残っているからである。

2 読みを導入される語りにかかわる状況の文脈

2.1 俳句をめぐる話し合いの事例

俳句「鬪鶏の眼つぶれて飼はれけり」(村上鬼城)の解釈をめぐる話し合いプロトコルから、読みを導入される状況の文脈が語りの構造に密接に関連している例を示す。

このプロトコルは、2005年6月9日 上越教育大学における講義「学習臨床学特論」の講義中において話し合いデータの分析のための資料としてその場で行った読みの交流の話し合いの録音記録(ICレコーダーによる)を、トランスクリプトしたものである*1。いずれも修士課程の学生5人(Sa, Im, It, Tu, St)が、それぞれの解釈文を作成した上で互いの解釈を提示しつつ話し合いを行っている。

次のような発話がある。

5 5 Im やっぱ思いやりっていうことの面から見ると、確かにね、たとえばこれ、もう、鬪鶏でどう、どうにもならない、//それだけど、でも、その鳥を作者の、あ、じゃねえ、飼い主の愛情が(2)救っているというかね、//2うん、そうもとれるのかなあ。ただ、これを見た(2)作者が、鬪鶏：っていうものが、ぱっと、わかるのか。(スー)((はっきりした呼気))

直前の箇所では、鬪鶏についての個々の読み手のイメージが十分に展開できず話し合いが行き詰まった傾向を見せ、4秒の沈黙がある。

ここでImは、「作者の、あ、じゃねえ、飼い主の愛情が」と自ら訂正しているように、作者(俳句テキストの読み)の一般的特徴からするとほぼ語り手

に一致)と飼い主を分けている。語り手が飼い主と一致するかどうかは、テキストそのものには書かれておらず、読み手が自らのイメージ化の中で状況の文脈を導入して補わなければならない情報である。個々の読み手は、それぞれ無意識であってもそうした情報を補っているが、Imは言い間違えとその修正という形でその補った情報を提示している。「これを見た(2)作者が、闘鶏：っていうものが、ぱっと、わかるのか。」と続けているように、鶏を見た語り手というものを想定して、飼い主は別にあるためその飼い主の愛情がそこから見て取れるのかどうかという疑問を提示している形である。

もともとこの俳句は、語り手が傍観的観察者なのか、闘鶏の飼い主なのかという「要点」*2を持っており、読みの分岐点*3の一つとしてそれが機能する側面がある。飼い主と闘鶏との関係をめぐって、「役目を終えた闘鶏に天寿を全うさせるやさしさ」を読むか、「無惨な姿でなお酷使される闘鶏のあわれさ」を読むかという読みの違いが現れやすい。闘鶏の姿に他を睥睨するような威厳の残芒を見るか、残酷なまでの落魄を見るかという違いでもある。飼い主が語り手でもあるということになれば、無惨さあわれさを読む解釈は一貫性という点で成立しがたい。

Imは、語り手を観察者としているため、飼い主の愛情を読む解釈を可能性として持っており、その上で疑問を提示しているのである。Imは、語り手が飼い主をどう見るかという問題を、この後繰り返し提示している。

96 Im 飼われているのを(2)何か(3)んー、何だろなー(4)／／(4)作者その飼い主の思いみたいなのが、この飼われ(2)ているのを、こう第三者としての、こう、飼い主の思いを筆者がどう見てるかっていうと、飼われている闘鶏を筆者がどう見てるかなっていうのを、今、この今、作った(.)ひっし、まあ、さくし：作者が、飼われている闘鶏をどう見てるんだらう。

100 Im 大きくは、ま、最初の話に戻ってくると、片目を失いながらも、全うした、その、姿を間接的にとらえて、作者はどうとらえたか。または全う、して、いない、まだまだ闘い続けなければならないのを：作者はどう見たのか。またそ

こに加わるとこれと自分自身が重なってくるのか／／っていうとこだね。／／2°うん°

このグループでは、闘鶏の鶏がどのような状況にあるのか、飼い主が思いやり・愛情を持っているのかという点をめぐって話し合いが展開しており、語り手の位置や役割そのものを話題としては話し合いが展開していない。しかし、Imの語りの構造にかかわる発言によって、他のメンバーが何らかの影響を受けた可能性がある。この点については、「3読みの交流における状況の文脈への言及」で検討する。

2.2 「走れメロス」をめぐる話し合いの事例

もう一つ、「走れメロス」をめぐる中学生の話し合いの学習のデータから、読みに導入された状況の文脈で語りの構造にかかわる事例を扱う。

この授業データは、「走れメロス」(学校図書『中学校国語2』平成12年度版)を学習材として2002年2月22日から3月2日にかけて5時限で行われた上越教育大学附属中学校2年での授業のうち、第3時限(2月27日)におけるグループの話し合いのカセットテープによる録音データをトランスクリプトしたものである。4人のグループで話し合いを行っているが、A「走れ!メロス。」というテキスト中盤の部分テキストと、B「塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。」というテキスト終盤の部分テキストについて、それぞれ「誰の声が聞こえるか」という学習課題に答え、それをめぐって話し合いが行われている*4。

この話し合いに次のような発話がある。

12 YS Bの部分ですが、Bの部分、私はメロスだと考えました。で、あの、その「メロスは、今ほとんど全裸体であった、呼吸もできず、2度3度口から血が吹き出たっていう132ページの1行目は語り手の文章だと思います。これはメロスがなんとかだった。とか、メロスはこんな様子でしたっていうふうに、こう、客観的に見たっていうか、ちょっと高い視点から見た感じで、メロスの状態を表しているんで、これは語り手の文章だろうと。(.)だけど、そのすぐ下にくる「みえる」っていうのは、あの、他の誰か見たわけでも

なく、メロスが見えたわけで、そこがもし語り手の文章だったらメロスは見えていた、とか、メロスは見ていました。みたいな過去形で、しかも上から見たっていうか、自分のことじゃないようなふうになってると思うんですよ。そうするとこれは、語り手の文章ではなくて、あの、一緒に走ってたセリヌンティウスのおじさん（(フィロストラトスの誤り)）でもなくて、多分メロスのことであろうと、そうすると、その、見えるって、その塔楼が夕日を受けてキラキラ光ってるって文も多分メロスのことではないでしょうか。と考えました。以上です。

24 TK 負けそうな自分に、こう、一生懸命呼びかけて、いるものなんだと思います。えーと、なんだ、ま、メロスだけに、こういう走れメロスという話だけにかかわらず、えっと、いろんな本に今まで、えーとその上に、例えば自分を励ます時とかなんか、あの、がんばれ私：：だとか、えーとなんかだとか、自分に呼びかけるようなことをよく、そういうシーンがよくあって、えーと、あと、そうその130から131にかけて、えーと、んーと：：何だ？ えーと、私は信じられているとか、えーと、私の命などは問題ではないとか、そう自分にこう：：思っていることを言っているの、この、走れメロスというのも自分に対して、一生懸命呼びかけて走ろうと、頑張っているんだと思います。え：：、それからBは、Bもメロスだと思いました。えーと、何だ、P132の何だL1？ のえ：：、メロスはほとんど全裸体であったから、えー、はる、あ何だ、え、2行目の、2行目までえーと、その二度三度口から血が吹き出たまでのところが一応根拠となる表現なんです、まず、メロスは、そうそう走っていることが読みとれると思います。そして、この、2行目の見えるという言葉は、う？

見えるという言葉？ と、そこまで、それはかっこのないメロスのまあ、言葉なんで、かっこのないだけで全部メロスの言葉ですね、まず。それで、えーと、そのあとに続く、その問題の「塔楼は夕陽を受けてキラキラと光っている」は、メロスがこのクラ、クラ、ん？ シラクスの町を見て感じたことではないかと思ったので、えーこれは、あれ、語り手でもなく、あのメロス自身が感

じて思ったことだと思います。はい、おしまい。

12 YS では、課題となっている「塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。」という部分テキストの近傍の表現から、「メロスは、今ほとんど全裸体であった、呼吸もできず、二度三度口から血が吹き出た。」という表現を取り上げ、それを「語り手の文章だと思います」と判断した上で、「これはメロスがなんとかだつた。とか、メロスはこんな様子でしたっていうふうに、こう、客観的に見たっていうか、ちょっと高い視点から見た感じで、メロスの状態を表しているの、」というようにその根拠を示している。これは根拠となる表現をあげて説明するように学習課題が設定してあることに対応しているわけであるが、語りの構造という観点から見ると、テキストに語り手の知覚が直接提示されることがあるものとして語りの構造を把握していることがわかる。「これは語り手の文章だろう」という判断は、その把握の上に立っているわけである。そして、それは、作中人物の知覚とは別のものであり、作中人物の知覚と語り手の知覚は交替してテキストに現れるということも自覚されている。「だけど、そのすぐ下にくる「みえる」っていうのは、あの、他の誰か見たわけでもなく、メロスが見えたわけで、そこがもし語り手の文章だったらメロスは見えていた、とか、メロスは見ていました。みたいな過去形で、しかも上から見たっていうか、自分のことじゃないようなふうになってると思うんですよ。」と二つの語りの仕分けの基準をも提示している。その上で、「塔楼が夕日を受けてキラキラ光ってるって文も多分メロスのことではないでしょうか。」という結論が導かれている。

ここに見られるのは、ナレーションの分析であると同時に、マクロな語りの構造（ナラティヴ）の分析になっており、ナラティヴに対する読み手の把握は、読みの方略に直接的に関わるという意味で、読み手独自の状況の文脈をなし、それが読みを導入されていることがわかる。

なお、「あの、一緒に走ってたセリヌンティウスのおじさん（(フィロストラトスの誤り)）でもなくて、」という言及は、物語内容の場面に知覚の基点をおく場合、その場にいる作中人物フィロストラトスにも知覚の主体となる可能性があることを、おそらくは半ばジョークで提示したものであろうが、こ

の発言が他のメンバーに影響を与えた可能性がある。この点については、「4 状況の文脈の共有における語りの構造の意味」で触れる。

24 TK では、Aの課題について、「えーと、なんだ、ま、メロスだけに、こういう走れメロスという話だけにかかわらず、えっと、いろんな本に今まで、えーとその上に、例えば自分を励ます時とかなんか、あの、がんばれ私：：だとか、えーとなんとかだとか、自分に呼びかけるようなことをよく、そういうシーンがよくあって」と述べ、他のテキストにも見られる類型的なナレーションの仕組みを状況の文脈として導入して「メロスの声だ」とする判断が行われていることを示している。これはまた、意識的ではないであろうが、語りの構造をメロスの語り一元化する方向性を相対的に持っている。その傾向は、Bの課題にかかわる「問題の「塔楼は夕陽を受けてキラキラと光っている」は、メロスがこのクラ、クラ、ん？ シラクスの町を見て感じたことではないかと思ったので、えーこれは、あれ、語り手でもなく、あのメロス自身が感じて思ったことだと思います。」という、近傍の表現との一貫性以外には根拠のない判断にも反映されている。他に根拠がないということが、可能な限りメロスの自由直接表現としての語りとする語りの構造の把握が、読みを決定していることを示している。「それはかっこのないメロスのまあ、言葉なんで、かっこがないだけで全部メロスの言葉ですね、」にある「まあ、」という言いよどみや「ね」という助詞による強調は、そうした事情の現れと見ることができる。

こうした比較的直観的な語りの構造の把握を背景とする読みについて、他のメンバーがどのように反応しているか、3・4節で検討したい。

この学習では、学習者はあらかじめ二カ所の部分テキストにおいて「誰の声が聞こえるか？」という語りにかかわる学習課題を提示されており、その課題にかかわって、テキストの文脈、状況の文脈に言及するしかない。しかも単元の導入段階での学習において、学習者から出てきた「話者」「作者」概念を整理しつつ「語り手」の概念について指導を受けており、語りへの着目という学習の文脈は前提されている。

その条件のもとで、学習者は、解釈課題への自らの答えをめぐって、近傍の部分テキストや語りのマクロ構造にかかわる直観的把握などを引き出しつ

つ、物語内容ばかりではなく物語言説に関連づけてそれぞれの読みを説明している。このことによって読みの交流が促進されている側面があると思われる。

3 読みの交流における状況の文脈への言及

前節で検討したような、導入された個々の読み手の状況の文脈について、交流活動を行っている他の読み手がどのように言及しているかについて検討する。

俳句「闘鶏の……」をめぐる話し合いでは、Imは、既に見たような語り手と飼い主との分離を、最初の解釈の提示においても、明確にはないが、場面の解説という形で行っている。

17Im えーとじゃ、ぼく：ですが、(2) これ、その場で闘ったのをみたわけではないんじゃないかなあと(.) 思って(.) えー(.) ふと、ま、訪れた、民家において、作者はこの一羽の鶏闘、ま、とりにこう、出会うわけですね。その瞬間、目にとびこんできたのが、こう、目がつぶれていた、こう鶏のこの姿であった。(以下略)

これは、場面の描写という形をとって、読み手Imの状況の文脈がリソースとして読みのプロセスに導入され、「作者」と呼ぶ語り手・作中人物がイメージ化されたことを意味しており、そのイメージをImが他のメンバーに提示している。このようにして導入された状況の文脈が同時に、語り手と闘鶏の飼い主は別の人物とし、その双方とも物語内容の世界の人物、つまり一種の作中人物であることを示している。この意味で、導入された状況の文脈は、ほぼ同時に語りの構造に対するメタ認知を形成しているということになる。実際17Imに続く発話は次のようになっている。

18Tu えーとですねー、あの一、ぼくも、その一闘鶏自体を見てたっていうよりも、どこかで(.) たぶんそういう鶏を見たんだっていう風に思ったんですけど、あの：：片目はつぶされ、されてっていつつぶれて(.) ふうふうに飼われているって姿っていうのは、すごくなんかこう、かわいそう(.)のように思ってしまうん(.) だ

けれども、でも、ま、そう、そうじゃないっ、ていう風に思いたいところもあって、ていうのは、

(2) やはり激しい(.) 闘鶏なので、えー片目がつぶれてしまうとか、こ(.) けがを負うって事はやっぱりあるだろう。(3) だから、この鶏はその役目を全うしたというか、えー(3)、やるべき事をやって、それが終わって、今に至るとい、ことで、えー、なぜかこのスポーツ選手の引き際のようなものをです、ちょっと((笑)) イメージしてしまったりも、しました。(3) 以上です。

Tu 自身の解釈を述べているが、その前提として Im の提示した状況の文脈を受け入れていることが「ほくも、その一闘鶏自体を見てたっていうよりも、どこかで(.) たぶんそういう鶏を見たんだっていう風に思ったんですけど」という部分から見て取れる。「も」は、Im のイメージを前提として自らの読みに言及していることを示しており、同じように語り手・作中人物を想定して、そこに知覚の基点をおいていることを述べている。このように、語りのマクロ構造にかかわる状況の文脈が共有化されることが分かる。

「走れメロス」の話し合いでは、YS の提示した語りの構造が、他のメンバーと違っているため、YS による質問によって、そのことについての言及がなされる。

112 YS TKさんのところでも書いたんですが、一人称を自分で呼びますかね＝

113 AH =呼び／／ます。

114 TK ／／呼びます。それは私も言おうとしたんです。

115 YS 呼びますか？

116 TK 呼びます。

117 AH 例えばかおりは：：とか言うでしよ。／／()

118 TK ／／違う、(笑い) そうじゃなくて、じ、一人称励ましたりするときとか？

119 YS 自分の名前を、まあ、自分はなんとかですとかっていうのはやるけど、(3) がんばれ俺とかあんまり言わないじゃないですか。

120 TK え、言うよ、言うよ(.) あ／／の：：

これは、表面的には、自分で自分の名前を言うかどうかという経験にかかわる状況の文脈の導入という形になっているが、「走れ！ メロス。」という言葉が、YS の場合には、超越的な話者によるものと想定されており、語りの構造の把握が異なっている。YS の言及及び他のメンバーの発言は、そうした語りの構造そのものへの言及という意味もあわせもっている。

4 状況の文脈の共有における語りの構造の意味

状況の文脈の導入が、語りの構造の把握につながる側面があることを見てきた。そしてそのような状況の文脈の導入が、グループでの話し合いで他者に提示されることによって、それがあある場合には共有され、その結果、他のメンバーの語りの構造に対するメタ認知に影響を与えるということが起こる。

「闘鶏の……」の話し合いで言うと、17Im の段階では Im は、「だから闘鶏というものの自分のもっているイメージとその奥にある本当のこのとりの姿、あるいは、せつなさ、うーん(.) 苦しみ悲しみ、でも闘わなければならない、とりの宿命、っていうものをはじめて、この、シーン、が作者にもたらしたんじゃないかな」というように、闘鶏の持つ「せつなさ」「苦しみ悲しみ」「宿命」を指摘しているに過ぎないが、すでに見たように、繰り返し語り手の闘鶏への心情を一種の解釈課題として提示しており、このグループでの話し合いは、この問題をめぐって展開している側面がある。それは、Im の「語り手が、どこかで、片眼となっている闘鶏を見た。」とする、場面の再現の形で導入した状況の文脈が、「語り手が飼い主とは別である」という語りの構造としてグループのメンバーに受容され共有されたために、他のメンバーとの間で解釈課題も共有されたためではないかと思われる。

たとえば、31It は、読みにおける迷いを表明しつつ、次のように述べている。

31It ((省略)) あと、(スー) それでも、飼われけりっていうことで、まあ、鶏だから自然の鳥じゃなくて飼われていると言うことで、こう、自分の意志(.) で生きていると言うよりは、なんか生かされているみたいなものを感じたりし

て、うん、生かされていると言うように感じると、なんか、まだ、こう、なおかつ、闘わなければいけないのかなあっ(。)という感じも受けるし、でも、そう、とらずに、この、飼い主の思いやりや優しさをそこから感じとるんであれば一役目を果たし終わった鶏を、こう、役目を終わったけれども、こう、これからも、飼い続ける飼い主の優しさや思いやりも見られるのかなあと思ったり、まだ、自分の解釈が定まらないんです。

これについては、33Imが、「わかっていて飼っている飼い主：／／が、何だろうな。そのね、思いやりもねえ、あるのかなあ、と思う(。)思うんだよね。」「鶏を、飼：わ：な：ければならないような、そんな、この飼い主にとっての、うん、自分の、ではどうにもならない人生みたいなね、(スー) 闘いの中((笑))でね、この鶏を飼わなければならぬ、というようなことも、あるのかな、とか。」というように反応しており、ここに語りの構造が共有されていることがわかる。

また、メンバーのSaは7Saで、「闘いにはまけ(。)て飼われているという、状態ではあるけれども、もう闘いには出なくてもいいという、えー(2) 帰属というかそういう、感じを、この句から読み取りました。」としていたが、66Saでは、次のようにも述べている。

よーく見てみると、確かに、つぶされてじゃなくて、つぶれてっていう、受け身じゃなくて、つぶれてって書いてあるけど、前、Itさんが指摘されたので、ちょっと考えてみると、／／闘いはけっこう過去のことなわけで、／／2 現在闘っている訳じゃなくて、／／3 目がつぶれている状態を見て、過去闘ったっていうことを、見ている人が推測しているわけで、／／4 その、今見てだと、飼われている状態になって、だから、(スー)° なんていうんだろ°、もしそれを、なんか二重に、その時間の空間を考えてみようかなって、思ったんですけ°ど°。そのときの闘いのことを思い、現在の鶏のたたか、闘いという(3)／／5 ような二重の闘いの構造があるのかなあって、今、聞いてて思ったんですけど。はい。

67It / / うーん

68Tu / / 2うーん

69It / / 3うーん

70Im / / 3うーん

71It / / 4うーん

72It / / 5うーん

73It 今も、別な意味で闘っている?。=

74Sa =はい。

直接的には61Itの発話に対しての発話であるため、Itによる相づちが繰り返し入っているが、「目がつぶれている状態を見て、過去闘ったっていうことを、見ている人が推測しているわけで、」とあるように、Imの導入した語りのマクロ構造が共有化されていることがわかる。「闘いを終えた鶏の安らかな暮らし」に重点のあった読みが、61Itの「企業闘士みたい」「ぼろぼろになってーでも、飼われている、闘わなくちゃいけない。」という解釈に誘発され、Imの導入した語りの構造にのって、「二重に、その時間の空間をかんがえてみようかな」というような語りの現在ともう一つの物語の現在を重ねる読みが形成されていることが見て取れる。

「走れメロス」をめぐる話し合いでは、次のような発話がある。

89 AH 多分あのですね、あのぼくが最初見たときにあの、ふと思ったんですけどあの、「メロスは今はほとんど全裸体であった。息もできずに二度三度口から血が噴き出してきた」ってのは多分、フィロストラトスに、が、あのそのメロスの状況を観察していて、ああ、メロス様というところでようやくあの、あのメロスに声をかけていて、あの、その前までが、あの、メロスを観察していたときの、あのフィロストラトスがあの、見ていた状況を表してるんじゃないかと思ったので、はい、そうしました。まあ以上です。はい。終わった：：。

AHは前の時間、病欠をしており、この場で学習課題への回答を考えながら行っている。「多分」とか「終わった：：」という部分にその状況が現れている。そしてまた、そういう条件があったため、ここまでの話し合いにおける発話が、内容的にも影響しやすくなっている。フィロストラトスという作中人物に知覚の基点をおき、見ている状況を表しているという読みは、既に言及したように、12YSの

「語り手の文章ではなくて、あの、一緒に走ってたセリヌンティウス（(フィロストラトスの誤り)）のおじさんでもなくて、多分メロスのことではないでしょうか」という発話に反応したものと思われる。YSもBの学習課題については、メロスの声だとしており、AHだけが独自の読みを提示した形である。ここにはメロスとはほぼ同一の知覚の基点を持つ作中人物が存在し、その声だとする解釈が可能であったため、YSの冗談めいた発言を敢えて取り入れるということが可能であった。おそらく背景には「疲れているメロスに塔楼の姿を描写する余裕がない」という常識的な判断があるものと思われるが、また同時に、語り手がメロスとは別に想定されるというマクロな語りの構造を前提しているために、他の作中人物の知覚を提示することも可能だという判断があるものと思われる。それはまた、YSが他のメンバーよりずっと語り手の独自性を強く認める語りの構造の把握を行っていることを受けて、その把握を共有したことでもある。このように、他者の導入した語りの構造の把握が、共有されることにより、読みに影響を与える場合もある。

5 結論

以上見てきたように、①「読みには、読み手によって語りの構造の把握にかかわる状況の文脈の導入がなされる」こと、②「読みの交流活動において、語りの構造の把握にかかわる状況の文脈についての他者からの言及がある」こと、③「語りの構造の把握が共有されたりすることによって、読みが影響を受けて変化する場合がある」ことがわかる。

扱うテキストによっては、語りの構造そのものの把握が、重要な読みの交流の契機を形作る可能性がある。それはまた、そうした学習課題を中核とした学習過程のデザインが可能であるということでもある。

今後、学習者の発達段階や学習材、学習形態に応じて、どのような学習過程がより有効なものとして機能するのか、学習過程のデザインの条件を明らかにしていくことが課題である。

注

*1 トランスクリプトの形式は以下の通り。

・発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。

・発話には発話番号を付す。

・発話者をアルファベットで示す。

・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

記号

／／ 発話の重なり。直後の／／の後の発話が重なっている。（／／2は直後の／／2の発話が重なる）

= 途切れのない発話のつながり。直後の＝の後の発話がつながっている。

() 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。

(3) 3秒の沈黙。

(.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。

: : 直前の音がのびている。

— 直前の音が不完全なまま途切れている。

、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。

? 語尾の上昇。

。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。

_____ 下線部の音の強調（音の大きさ）。

° ° 間の音が小さい。

(()) 注記

以上の記述方法は以下を参照して定めた。

P・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析』くろしお出版 1993

西阪 仰『相互行為分析という視点』金子書房 1997

好井裕明・山田富秋・西阪 仰『会話分析への招待』世界思想社 1999

野村眞木夫『日本語のテキスト—関係・効果・様相』ひつじ書房 2000

*2 松本（2003a）「読みの交流における話題と話し合いの様相」において、山元（2002）をふまえて詳しく論じた。

*3 松本（2005c）「読みの分岐点と読みの交流活動」において、鳴島（1993）をふまえて論じた。

*4 この授業における別のグループの発話記録については、すでに松本（2003a）「読みの交流における話題と話し合いの様相」でデータとして分析を加え

ている。

文献

片桐雅隆 2000 『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開』世界思想社

佐藤公治 1996 『認知心理学からみた読みの世界 対話と協同的学習をめざして』北大路書房

鳴島 甫 1993 「生徒の多様な読みを整理するための基礎研究—『羅生門』を例として—」『筑波大学学校教育論集』第16巻 1993.12 pp.159-170

松本 修 2000 「ナラトロジーの役割—「山月記」を具体例として—」『読書科学』172 日本読書学会 2000.7 pp.51-57

松本 修 2001 「文学の読みとその交流の実践的意義」『国語科教育』第49集 全国大学国語教育学会 2001.3 pp.49-56

松本 修 2002a 「「走れメロス」の語り」『宇大国語論究』13号 宇都宮大学国語教育学会 2002.2 pp.27-39

松本 修 2002b 「ナラトロジーと国語教育学研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書 2002.6 pp.479-486

松本 修 2003a 「読みの交流における話題と話し合いの様相」『国語科教育』第54集 2003.9 pp.11-18

松本 修 2003b 「「語り」に焦点化した読みの交流における話し合い活動の内容と形式」『Groupe Bricolage 紀要』No.21 Groupe Bricolage 2003.12.28. pp.20-29

(2005d 改訂 「「語り」に焦点化した読みの交流における話し合い活動の内容と形式」(完稿)

『臨床教科教育学会誌』第4巻第1号 臨床教科教育学会 2005.10 pp.51-61)

松本 修 2004a 「国語科教育研究における話し合いプロトコルの質的三層分析」『臨床教科教育学会誌』第3巻第1号 臨床教科教育学会 2004.6 pp.74-82

松本 修 2004b 「読みに導入される子どもの文脈とその交流」『月刊国語教育研究』日本国語教育学会 2004.12 pp.4-9

松本 修 2004c 「まど・みちおの詩を読む—生きる証としての読みとその交流—」『Groupe Bricolage 紀要』No.22 2004.12 pp.19-32

松本 修 2005a 「「高瀬舟」の語り」『日本語と

日本文学』40号 筑波大学国語国文学会 2005.2 pp.1-12

松本 修 2005b 「状況の文脈を「資源」とした読みとその交流の可能性」『国語科教育』第58集 全国大学国語教育学会 2005.9 pp.10-17 (全国大学国語教育学会第107回大会自由研究発表に基づく)

松本 修 2005c 「読みの分岐点と読みの交流活動」『表現研究』第82号 2005.10 pp.70-80

松本 修・桃原千英子 2004 「「ブラジルおじいの酒」における語りの重層性と読みの形成—教材化研究の視点から—」『表現研究』第80号 pp.86-94

山元隆春 2002 「コミュニケーション行為としての文学教育」『国語科教育研究』全国大学国語教育学会第103回大会研究発表要旨集 および当日資料

山元隆春 2005 『文学教育基礎論の構築—読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』 溪水社
Bal, M., translated by van Boheemen, C., 1985
Narratology: Introduction to the Theory of Narrative,
University of Toronto Press

Prince, G., 1987 *A Dictionary of Narratology*, University of Nebraska Press

本論文は、全国大学国語教育学会第109回岐阜大会(2005年10月30日・自由研究発表)において発表した研究をもとにしている。議論に加わってくださった諸氏に感謝したい。

二つの話し合いプロトコルの全体については、次のホームページに公開する。

<http://www.geocities.jp/joetsugakurin/omhp>

(上越教育大学)

2006. 3. 3 発送